

# 『モノトーンな時代』

山口 恭弘

鶴見に在る総持寺、通称本山はそれ程高い山ではない。海抜二、三十メートルあるか位だ。入口から石造りの立派な常夜灯と松の木が点在する石畳の道が緩やかな昇りとなって百米位続いている雰囲気は子供心にも莊嚴な気持になり、压倒され静々と歩む足取りであった。

凡そ半世紀以上前の風景が果して今でも存在しているか定かではないが、心象風景は何才になっても蘇るので嬉しい。が然し戦災の最中に逃げた道は無我夢中で、気が付いた時は、遠くに上る火花ではないが、探照灯に照射されたあのB 29の銀翼光る大きな爆撃機が見られた場所であった。

昭和二十年の夏が蘇って来た。梅雨は早々に明けた。暑い、空は抜ける青色になった。戦争中とは思えない静かな日もある、姉や兄達が「これからが勝利に向かっ

て進んで行くんだぞ」と話して居る。「お前は何う思うんだ」と問われた。

「判らないよ」(心の中では負けるんじゃないか)面と向っては言えない言葉であった。

終戦の日の僅か二ヶ月前辺りの苦悶が続く。既に犠牲者は我が家でも四才下の弟が二月に亡くなった。

夜半に発熱したが、

「夕方から様子が変だったのよ」と姉が言って居た。

同時に空襲警報のサイレンが鳴り響く、おふくろが暗闇の防空壕の中で、

「大丈夫だよ、だいじょうぶだよと強く抱き締め、夜が明けたら直に病院行こうね」とお経を上げる様に聞いて居たが、翌朝弟は冷たい軀となって五才のあどけない顔をしたまゝ逝ってしまった。空襲が無ければ病院に連れて行かれたのに、と姉は悔しがって居た。戦争は残酷なんだ。全く憎い。

未だ舌が良く廻らない幼児がラジオから流れる軍歌に感化され一生懸命歌う「ナニヤツボタンはサクラにイカリ♪キョウもトビユトビユカシユミガウラに……」姉が一番可哀相なことをしてしまった、と泣き崩れ半ばヒステリック状態「ヤスが替れば良かったのよ。あ

の子は頭が良かったのよ」

「……」丁度外から帰り、裏庭の小さな池に鮎一匹居るのを出て来ないかと飽かずに見て居た。(家の中で何か俺のことを言ってるな)二月末は外は寒いが案外平気だった。どちらかと言えば無口で家の中より、外で遊ぶ方が好きであった。

夕方になれば女共は静かになる、絶対的な親父が務めから帰って来るからだ。

自分と親父との会話は殆どなかった。夕餉の前にお袋は台所から十能に炭火を入れて、手際良く鉄瓶が用意され、それがちんちん湯を沸し始める頃、格子戸の聞く音がする。機嫌が悪い時は相手構わず文句を言う、が帰って来ると不思議と家の雰囲気ピシッと締る。之がやはり明治生れの両親の在り方であったのか。ラシオは遠慮なく軍歌だ、が消えた。

『東部軍管区情報、敵機数機ハ御前崎上空ヲ北東ニ向ツテ進入セリ。繰返ス……』又か(此んなにしょっちゅうでは負けるかな…)ラジオで聞いていた兄が「又来るぞ」と知らせる。防空頭巾を被る。身支度をする内にサイレンが鳴り始めた。「バリ、バリッ」飛行機の爆音と同時に。防空壕へ飛び込んだ後だから良かったが、戦闘機の機銃掃射の弾の破片が家の軒下で見

つかった。

静かな日は夕暮れ時、記憶に残る場面だ。親父が長火鉢の前で銅壺から取り出した徳利と薄口のチョコで、ベ鯖か何かをつまみにして焼酎を飲む姿が脳裏にある。大人になったらあんな事出来るといゝなと思った。

でもお袋の自慢話と愚痴話の中に必ず出て来る鶴見の山の手の土地のこと。「新町の切替えで貨幣価値が下がってさ、生活出来やしないわ、お父さんがもう少し長く働いて呉ればあの山の陽当りのいい土地に家を建てさ、いゝ所よ。本当に良かったのに」身内の心易い者が来ると切りがなくなっていた。之は戦後の一部を先に書いてしまったが、大きな声を出せるのも平和な証拠。

(続く)